海外生活エッセー パリ事務所

コロナ禍が変えたフランスのマスク事情

(一財)自治体国際化協会パリ事務所　所長補佐　星　奏衣（札幌市派遣）

コロナ禍以前に抱かれていたマスクの印象

マスクは病人が着けるもの。フランスでは、マスクに対してこのような印象がもたれており、新型コロナウイルスが大流行するまでは、自他の感染予防のためにマスクを着ける習慣はありませんでした。

仏国内で同ウイルスの感染者が増え始めた 2020 年２月頃にも、予防のためにマスクを着用する、という認識はまだ薄かったように感じます。私自身、病人＝ウイルスの感染者と見なされて、無用なトラブルを招くことを避けるため、マスクの着用を控えていました。公共交通機関利用時などにマスクをしている人もいましたが、周囲から距離をとられている印象でした。

都市封鎖を経て生じた意識の変化

その後感染者が激増したフランスでは、3月中旬に外出禁止令が出され、約２か月にわたり都市が封鎖されました。ロックダウン中は医療従事者へ優先的にマスクが供給されたため、市民が入手することは困難でしたが、封鎖解除に向けて政府が安定的な供給を確保したことにより、５月上旬には薬局やスーパー等で使い捨てマスクが入手できる状態になりました。また、販売価格には上限（1枚あたり税込 0.95 ユーロ＝約 117 円）が定められ、法外な値段での取引ができないよう政令も整備されました。

公共交通機関内でのマスク着用義務化などを行ってきたフランスですが、夏期に感染が再拡大し、現在はスーパーや企業内を含むすべての公共の屋内の場で、マスクの着用が義務付けられています(注)。また、感染拡大が特に進むパリなどいくつかの地域においては、屋外でのマスクの着用も段階的に義務付けられました(注)。いずれも、違反者には罰金（135 ユーロ＝約 17,000 円）が科せられます。パリでは、８月上旬には 40 度に迫るほどの猛暑日を連日記録しましたが、当時は屋外での着用がまだ義務付けられていなかった地区でも、自主的にマスクを着けて通りを歩く人が多く見られました。調査によると、フランス人の約 64% が、屋外における公共の場でのマスク着用義務化に賛成すると回答したそうです。

都市封鎖が始まった当初は、一般市民のマスク着用は不要だとしていた政府が、その後有用性を認め着用を義務化したことも、フランス人のマスクに対する認識が変化した背景にあると考えられますが、こうした変化により予防に対する意識も高まったと感じています。

マスク着用が義務であることを伝えるポスター

変化を前向きに捉える

現在、衣料品店や雑貨店、マルシェ等、さまざまな場所で布製のマスクが販売されています。デザインもさまざまで、衣服とマスクの色味や柄をあわせてコーディネートを楽しんでいる人も多くいます。マスク着用の習慣がなかったフランス人にとっては、着用の義務化は、今までの生活に制限が加えられたと言える状態です。しかし単に着用が義務だから、というネガティブな理由だけでなく、ファッションとして楽しむなど、変化を前向きに捉えています。この姿勢を、ぜひ見倣いたいです。

マスクもファッションの一部へ

（注）11 歳未満の子供は対象外。

（2020 年 10 月 19 日時点の状況に基づいて執筆しています。）